The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現象学と方法の問題
Author(s)	里見, 軍之
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36770
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏名・(本籍)	里見軍之（さとみぐんし）
学位の種類	文学博士
学位記番号	第 8764 号
学位授与の日付	平成元年6月16日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**現象学と方法の問題**
論文審査委員	(主査) 教授 三輪 正 (副査) 教授 塚嵜 智　教授 荒牧 典俊

論文内容の要旨

一般に現象学と総称される哲学は現代の世界の哲学思潮を代表するものの一つであるが，それがいかなる哲学であるかについては必ずしも明確でなく，とくにその方法としての性格については問題が多く残されている。本論文は方法の問題を手掛りに現象学の本質を探ろうとしたもので，第一章「現象学と方法の問題」，第二章「意識と時間－フッサールの時間論－」，第三章「言語と論理－フッサール論理学の展開－」の三章から成る。以下順を追って，各章の要旨を述べる。

第一章は現象学における方法概念の問題点を指摘しその解明を試みる。「方法としての現象学」と題した第1節では先ず，現象学的方法の原則としばしばみなされる「事象そのものへ zu den Sachen selbst」という言葉を様々な角度から論じ，その現象学的意味を明らかにしようとする。そこではハイデッガー，ヘーゲル，フレーゲ，ブレンターノらの同様発言と対比しつつ，フッサールにおけるこの言葉の含蓄が追求され，この言葉が三つの意味，即ち，問題そのものに直接向かおうとする研究姿勢，主題になっている事柄の直観可能性，その事柄の客観的自立性，を含むことが指摘される。ハイデッガーはギリシア語を援用しながら「事象そのものへ」が，現象の根拠をなすものでありながら普通は隠蔽されているものを，覆いを取り除いて露わにすることだと解釈するが，この解釈は後期のフッサールにも影響を与えて，「事象そのものへ」は「本質を隠蔽性から取り出し，端的に見させること」になると著者は言う。フッサールとハイデッガーの相互影響を論じたこの箇所は本論文中でも特に興味深い箇所の一つである。

「現象学の方法」と題した第2節は現象学の方法の核心とみなされる「範疇的直観」及び「本質観取 Wesenserschauung」に的をしぼり，その意味を明らかにしようとする。カント的用語法では形容矛盾とみなされかねない範疇的直観の語でフッサールが範疇的諸形式の客観性を基礎づけようとしたこと，本

質観取も範疇的直観の延長線上にあることを，本論文は綿密に追求し論証している。本質観取はフッサールの場合単に数学のみでなく色や音等の感覚的事象にも見られる事態なのであるが，本論文はこれをカントの『純粋理性批判』第一版の超越論的演繹論における三段の綜合と比較しつつ考察している。また直観と密接に関連する「明証性」についても，それが単なる確信ではなく，各種の度合いを持ち，否定の可能性をすら含むものであることを指摘し，更に，「現象学の方法」と「方法としての現象学」とが相補的な関係にあることを注意している。

第3節は「超越論的哲学としての現象学」と題され，現象学のより実質的な方法としての「現象学的還元」が論じられる。著者によれば，通俗的現象の覆いを取り除き，その意味と根拠をなすものとしてのエゴ・コギトに達する方法が現象学的還元であって，それはデカルトの方法的懐疑をモデルにして考えられているが，しかしそれによって得られたものはデカルトのそれのような閉じた実体ではなく，志向性という構造を備えた超越論的主観性であって，現象学的還元の目的は「隠蔽された主観的形成方法の露呈」にあるとのことである。著者は更に，フッサールにおける現象学的還元の動機をたどって「純粋な認識愛を満足させる」良心あるいは実践理性があることを指摘しているが，しかしそれにもかかわらずフッサールの哲学を根本的に支えていたものは，カント的超越論的思考であったであろうとしている。

「超越論的」とは，カントと同じくフッサールにおいても，認識の仕方を反省するメタ認識であって，客観を構成する主観のアプリオリな媒介機能を表すものであるが，「構成」という面から言えば，フッサールの場合の構成は，カントのように純粋悟性概念としての範疇を感性的素材に適用することではなく客観的なもののなかに範疇的なものを見いだすことであり，とりもなおさず現象が自らを示す際の主観の働きが構成であると著者は指摘している。

最後に著者は後期のフッサールにも言及して，そこでは範疇的直観の如きいわば高次なものを基づけるところの低次なもの（例えば下意識）が論じられること，各意識の段階は普遍と個別に媒介されている特殊だとも言えるであろうこと，従って現象学は或る意味でヘーゲル的な「意識の経験の学」となるであろうことを指摘している。

第二章はフッサールの時間論を，① 前経験的時間における内在的統一に関連するもの，② 客観的時間における経験の事物に関連するもの，③ 絶対的な時間構成的意識の流れに関連するもの，という三つの主題に分け，各主題にそれぞれ一節を与えて考察したものである。

第1節は「前経験的時間」と題されているが，前経験的時間とは分節的構造即ち過去把握，現在，未来予持という分節を備えた準時間的秩序を示し，しかもフッサールの場合アウグスティヌスと同様その秩序は「現在」中心であることが言われる。この秩序を表すために著者が試みている時間図表には未来予持の部分が新たに加えられていて興味深いものがある。

第2節は「経験界の時間」と題され，現象的時間，客観的時間，相互主観的時間が順次考察される。著者は，フッサールの時間概念を要約すると時間とは基体（現象的実体）について，且つ基体に即して我々が読みとる，或は読み込むものであり，純粋に主観的でも純粋に客観的でもない言わば第三性質のようなものだとしている。

第3節は「意識生の時間」と題され，主体が自己自身を時間的なものとして自ら構成してゆく「自己

時間化」の問題，及び「生き生きとした現在」の問題が論じられ，生きた現在としての「私は機能する」こそ根源的事実性であるとされる。

第三章はフッサール哲学の重要な構成要素である論理学を言語との密接な関連において考察したものである。

第1節「言語から論理へ」ではフッサールが論理学を単に命題体系として形成することに満足せず，より根本的に言語の意味作用から出発して考察しようとすることが述べられる。

第2節は「論理学の構造」と題され，フッサールの「純粋論理学」が意味の純粋形式論と意味の純粋妥当性論とからなること，それは論理学を単なる記号の演算と見る形式主義に反対し，記号の意味と起源を問うものであることが指摘される。

第3節は「論理と生」と題され，フッサールが論理の根底に生を見ようとしていること，その場合，判断ないし命題をその「隠された前提」に遡って問おうとし，「前述語的判断」即ち「知覚」に基づけようとすることが言われる。フッサールの超越論的論理学は論理学的なものを知覚世界において発生するものとして説明するというのである。

論文の審査結果の要旨

本論文は，人間の思考活動の隠れた源泉の飽くことのない探究者であるフッサールの哲学を，方法，時間論，論理学という三つの主要問題を中心に克明にあとづけ，その現象学の成立，展開の過程を明らかにしようとしたもので，その成果は，その難解さの故に従来多くの研究者を悩ませてきた「範疇的直観」「本質観取」「現象学的還元」「超越論的」等の概念が簡潔で的確な表現に集約して解明されたことに端的に現れており，このことは今後の研究者に稗益するところが大きいであろう。本論文において著者は，単にフッサールのテキストに忠実に現象学の諸概念を吟味するばかりでなく，必要に応じてデカルト，カント，ヘーゲル，ハイデッガーらのそれとも比較して，フッサール自身の思想を判明に浮かび上がらせようとするのであり，これは著者の該博な西洋近世哲学史ならびに現代思想にたいする知識によって可能になったものであるが，これによってフッサールとこれらの哲学との相互関係にも光が投じられたことの功績も大きい。特に，従来から知られていたフッサール現象学のハイデッガー哲学形成への影響や，ハイデッガーによるフッサール現象学の本質解明についての言及に加えて，初期ハイデッガーの思想がフッサール後期の現象学展開への道を開いたことの指摘は貴重である。

本論文は論文題目にも謳われているように方法を主題とし，学問の方法としての現象学の性格や，現象学自身の方法について，詳細に分析したうえで，その方法が古来の難問である時間論や論理学の基礎づけの問題に応用され，新しい現象学的時間論や超越論的論理学が開拓されたことを論ずる。このように現象学の方法を通して，現象学的時間論や超越論的論理学が展開したことを解明した功績は大きいといえよう。

しかしながら他方で，カント的あるいはハイデッガー的なものとの類似性を強調するあまり，フッサー

ル独自のものが十分に浮かび上がらない恐れもないではない。とくにフッサールの「理性の批判」がヘーゲル的な「意識の経験の学」として読まれるのではないかと論ずることには，直ちに首肯し難いものがある。またベルクソンの時間論に言及して，ベルクソンは時間を実体的なものとして考えているのではないか，との著者の言葉はベルクソン研究者から反論を招きうるものであろう。しかしこれは解釈の問題であって瑕疵というほどのものではない。

これらの問題が残るとしても，本論文が現象学哲学の研究において持つ意義がそれによって損われるものではない。審査委員会は，本論文が文学博士の学位請求論文として十分に価値のあることを認定するものである。